

73 明治9年10月4日 菊池長閑宛

第十二号十月四日 (長閑注記)

今日学校へ始まりたり先達の吟味にハ余り毛唐人等に負た風もないから安心セリ即今大統領州知事議員撰挙の仕度にて新聞紙ハ夫計リ彼地此地にて名々の名代人を撰ふ節党々の重なる人々か諸人に斯様くゝたから己の党の人を名代人に撰方ハよしと云述へ人民感心すれば声を揚手を打て誉なり各党右の如く^{当国には}政事党二ツあり己の党の人を大統領にも州知事にも名代人にも撰セ様と励み合なり此間近所に右様の会かありたり先町の広小路とも云所に^ツ棧敷様の高台を拵毛氈を布並四柱に大ランプを点す町家ハ支那^{マツ}熾灯と云小田原熾灯を窓前につるし貧富に因て数の多少あり諸人近町村より集り来是ハ合衆党^二ツの^一ツの会合故自ら其党の人多し暫してカンテラを棒の先に付之を鉄炮の替りをしたる兵隊四小队計り大小大鼓喇叭に足並揃て行列をなし彼台を取巻たり

此兵隊ハ学校の書生にて二十より十三回に至る迄の小供なり各遣て松明行列と云ふ昔ハ松明を用たるか夫より〔^(抹消)二人の演説家台の上に突立〕大統領并副大統領と為へき人々の名に州知事権知事と成へき人々の名を書た国旗を両側の楼窓より引たる綱にて町の真中に懸たり花火を挙三度祝の誉声を発す夫より二三人順を逐て演説セリ此を旗揚と名付即今諸方に此類の会あり人民ハ演説家の云事を害と思えハ撰挙時に成て旗に書て有人々に入札する趣向なり

武夫拜

御尊父様

至机下

(長閑注記)

「十二月十一日達し日数六十九日

返事明治十年一月十九日第一号ヲ以差出し」